

編纂後記

一、編輯の経過

内海勝正

創立百周年の記念事業として、慶応義塾柔道部史の第二巻を編纂する企ては、昭和五十年九月の三田柔友会の委員会で決った様です。たしか十月四日、会長の秋山君から、その編纂を引き受けて呉れとの電話がありました、全く降って湧いた様なことに、聊か当惑し、一、三日考えさせて貰うことにしましたが、元来、私には全く編纂に關しての知識もないので、結局下手な考え休むに似た状態のまま、一週間を過ぎ羽鳥君等からの要請もあつて十月十二日遂に五里霧中ながら、御引受けすることに致した次第でした。「盲、蛇におじず」で、後になってよくも無責任に御引受けしたものと、つくづく後悔した事は事実です。

十一月七日交詢社で部史編纂の打合せ会が持たれ、秋山会長、羽鳥、高木副会長、石渡委員長、富沢委員の御參集を得て、次の編纂方針を提案し決裁を得ました。

- (一) 全般的に第一巻の形式に倣い、昭和八年から五十一年に亘る四十四年間を載録する。
- (二) 編纂業務の補助委員として、柔友会員中より三乃至四名を指名する。

(三) 発刊に至る期間は概ね二年間とし、編纂室を品川区西五反田五―五―二内海方に置く。

以上

そこで先づ第一に着手しなければならないことは、資料の蒐集でした。それには資料が何処にどんな形で存在して居るかが問題でした。それには四十年前の記録が、戦災、敗戦、学校柔道禁止の時代を、果して無事であつたかが心配でしたが、取り敢えず部の保存記録が在ると思われる日吉の合宿、道場、綱町道場の押入の搜索から取り掛り、学

生諸君の協力で主として戦前の記録が埃の中から最初の資料として発見され時ほど嬉しかったことはありません。更に体育会本部所蔵の体育会誌、体育会月報、各部の試合届等貴重な資料を体育会主事の川島先生や中西さんの御協力と拝借し、亦塾史資料室長だった故倉田君の厚意で慶応義塾百年史、三田評論の関係記事のゼロックスが入手出来ました。

十二月の始め羽鳥輝久君が洋服の函に一杯の貴重な資料を届けて呉れ、漸く部史の編纂構想が漠然ながら見えて来た様な気がしました。その頃渡辺紀久男君が委員として加わり、資料の年度別区分が始められ、更に年末近く柔友会報編輯委員の杉浦 潤君、滝沢緑郎君が、亦小林浩一君が委員に選ばれ、茲に柔道部史編纂室としての編成を完了した次第です。

明けて昭和五十一年一月七日、第一回の編纂会議を開いて、編纂計画に就て協議し次の実行計画を決定しました。

- (一) 既に蒐集した資料を検討し、分類して「年度別行事月表」に整理する。
- (二) 「年度別行事月表」に基いて、未集資料を検討し、その発見、蒐集の計画を樹てる。
- (三) 一月二十日付で部史編纂の挨拶状を発送し、併せて資料の提供を御願いする、資料調査のアンケートを添えて、会員六二〇名宛に発送しました。

私等編纂室は会員御手持ちの資料の発掘に大きな期待をもって居りましたし、これは必ず部史の内容に大きく反映する資料になると待望して居りました。然るに結果は予想に反し、御返事を頂いたのが僅か五十四名、而も期待した資料の発掘はその四分の一に過ぎませんでした。実は、私もこの結果には啞然とし、今後の部史編纂に尠なからず不安を感じました。

然しその中から田岡 協君、安田義也君、小坂 肇君、鈴木正朋君、鈴木 昇君、長島慶一君、田坂 昭君、小倉

秀雄君、堀内義太郎君、田村 泰君、安藤洋志君等からの貴重な資料が届けられましたことは、其後の編纂室の意慾に多大な励ましとなり、部史資料完成の大きな要因となったことを深く感謝するものであります。

その他に客観的記事として講道館出版の「柔道」、読売新聞運動部の記録を収録することが出来、概ね前記の「年度別行事月表」の穴を埋めることが出来ましたのが昭和五十一年六月初旬でした。

これと併行して、明治、大正、昭和初期の先輩、それに各年度から大体一名〜二名（昭八〜五一）の方々に、各々その時代のトピックスを主題とした寄稿文を戴く御願ひ状を発送しました。

その間、資料を各委員の担当に従い、五つに分けて各自持ち帰り、原稿の作成に入りました。即ち、渡辺君が二十七年から三十二年、小林君が三十三年から三十九年、杉浦君が四十二年から四十六年、滝沢君が四十年と四十一年及四十七年から五十一年、それに私が昭和八年から二十六年までと年表その他全般の調整と寄稿文の構成をそれぞれ担当し、五十二年四月原稿完成を目標に、毎月一回乃至二回の日曜日参集して、原稿作成への調整を繰り返しながら漸く予定の通り四月末、概ね原稿が完成しましたが、行事、試合記録だけで二五〇〇枚（四〇〇字詰原稿用紙）となり、これに寄稿文を加えると三〇〇〇枚に及ぶ莫大な量になり、活字にして約一五〇〇頁と言う、当初の予定約一〇〇〇頁をはるかにオーバーするものとなりました。予算の関係もあって、一〇%の縮少を計ることに成りました。再び、削除規準を決めて各担当者手分けして削りましたが、漸く一〇%程度しか減りませんでした。尤も編纂委員に見れば、苦心して蒐集した資料であり、止むを得ないことではありませんでした。

これ以外は活字組みの段階で少しでも縮少を考えねばならない事となり、最初計画した一頁九七二字を、二段組にして一頁一一五〇字に変更し、僅かながら縮少出来ましたが、結局約一三〇〇頁と予想した段階で、七月末校正刷りに入りました。始めの構想に比べると大分頁数が増え、その上無理な体裁になりましたが、四回の校正を重ね、漸く

御許し頂ける形に調えられたと思います。

一、構成の概要

構成は編纂計画の当初、第一巻に倣ふと決め、概ねその方針に従いましたが、百年史の後半部分としての第二巻としてではなく、百年の史観に立って、次の様な点で構成して見ました。第一は、塾柔道部の格言である福沢先生が塾柔道部のために揮毫された「心身之順、是柔道」の色紙と塾柔道の開祖とも謂ふべき和田義郎先生並に明治二十五年頃の幼稚舎生の稽古着姿の写真巻頭に載せ、第二は第一巻（明治九年より昭和七年）に属する部分を年表の形式に整理し、その時代の主な動向を見て頂く補いと、第三は年度毎のトピックスに付て各年一乃至二名の方の寄稿を載せ当時の思い出の中に時々／＼のムードに親しんで頂ける様にした等です。

今、塾柔道部史の編纂を担当致しまして、幸いその歴史の全容を通観することが出来ましたが、茲に私なりの史観を述べて編纂の後記を結び度いと思ひます。

塾の柔道はその始め福沢先生の教育の一環として奨励され、先生は執拗なまでに柔道の体育的価値に関心を寄せて居られたことは、和田先生の没後一時衰退しかけた幼稚舎の柔道に対して、福沢先生は厳しく坂田幼稚舎長を戒められた先生の書翰（年表明二九年度参照）に顕われて居ます。先生は「独立自尊の人」の完成を智育、徳育、体育のバランスに在りとされ、「先に獸身を養う」の主張を、当時柔術に依る健全なる身心の育成に求められました。亦先生は多くの西洋スポーツを採り入れて奨励されましたが、就中「礼に始まり礼に終る」と謂はれる柔道に、特に期待される処が大きかったと推察されます。即ち柔道部のために訓された「心身の順、是柔道」こそは、先生が塾柔道の行くてを指し示された塾柔道部に対する先生の理念であり、吾が柔道部の精神要素の核心であらねばならないと思ふのであります。我が柔道部にも百年に亘る間には、多くの起伏、盛衰がありました。この起伏、盛衰は必ずしも唯に

早慶戦や全日本の勝敗ではなく、福沢先生の謂われた、「心の修養と身体の鍛練とのバランスがとれた柔道こそ、塾の柔道である」との訓えが、兎角に戦後紆余曲折され、聊か方向を誤って居る様にも思える今日の柔道部が、もう一度福沢先生の訓えの原点に帰って、将来への方向を正すべき秋ではないかと思っております。

慶応義塾柔道部百年の流れの中に、独立自尊の人間形成への役割を我が柔道部が如何に果して来たか、亦今後の方角を定める上で本史が訴える史観を少しでも御役に立てて戴ければ望外の幸と思ふ次第であります。

部史第三巻が数十年の後に亦発刊される時まで、福沢先生の訓え「心身の順、是柔道」の理念が一層完成された我が柔道部の伝統として伝えられて居ることを祈るものであります。

最後に、この編纂の委員として二年間、私の非才を援けて頂いた渡辺、小林、杉浦、瀧沢の四君には、日夜多忙な勤務の中を、資料蒐集に、原稿作成に、深夜、休日も労はず、校正ともなれば出張の車中も惜んで、精励して下さいましたことに対し、深甚なる謝意を表します。

慶応義塾柔道部史第二卷（非売品）

昭和五十三年一月十五日 印刷

昭和五十三年一月二十日 発行

発行所 三田柔友会

編纂者 柔道部史編纂室